
エヴァマ

あんぱん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヴァま

【Nコード】

N0760Z

【作者名】

あんぱん

【あらすじ】

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの過去変です。

原作の彼女に近づいていく様子を書いていきたいと思っています。現在は吸血鬼化から十年が経過している所です。

まだ予定は有りませんが今後連載が続けばオリキャラ。オリ展開があるかもしれません。

エヴァま 第一話（前書き）

SS 投稿掲示板にも投稿する予定です。

初めまして。

皆さんに楽しんで頂ければ幸いです。

エヴァ 最高！

エヴァま 第一話

「はっはっはっはあ」

規則的な呼吸音が聞こえる。森の中を一人の少女が疾走している。身長は130cm位だろうか、頭から覆う外套を羽織っている為に素顔は確認できないが、フードから零れている金色の髪が腰まで伸びている。

少女の後方十メートルには白いフードを被り、長い杖を持った者たちが数人展開されている。

彼らの狙いは目先にいる金髪の少女。追跡を始め三十分、進展は見られていない。

走る少女の外套には何らかの技法によって迷彩処理が施されており少女の外套には常に周囲の風景が映し出されている。

その為目視による視認は非常に困難であり白フード達は決定打を打てないでいた。

森の中で高速を維持し疾走する事は難しい、人間によって手が加えられていない森林では更に困難を極める、しかしその少女は障害を物ともせずに森を走り抜ける。

それは彼らにとっても予想外の事で、これが更に白フード達を煙に撒く。

しかし現在はかなり速度で動いている為に迷彩の処理が追いついておらず、ワントンポ遅れた風景が投影され続けている。

白フード達はその隙を見過ごす訳がなく、徐々に少女を追い詰めていく。

しくじってしまった。失敗だ。

少女は心の中で悪態をつく。

元々吸血鬼である私は一つの町に長く留まる事が出来ない、10歳の誕生日以来全く持つて成長が見られない身体は人々にとっては不気味すぎるからだ。

吸血鬼化し十年、一つの場所に三年以上身を置いた事は無い、その行為の危険性が幼いながらも理解していたから。自信が人間の世界に受け入れられる事は無いと。

多くの地域や国を渡り歩き、たどり着いた一つの村、長く留まるつもりは無かった、自分が受け入れられるはずが無いと決めつけていたから。

所が村人たちは浮浪の者であつた少女を受け入れた。初めてだった、十歳の身で旅をしている私は何処に行つても気味が悪く見られていたから。

一人の少年が自分の家で一緒に住もうとも言つてくれた、少女は快く受け入れた。

そこには昔自分が失つてしまつた家庭が有つた、家族が有つた。優しさが有つた。愛が有つた。少女は泣いていた。

気が付けば四年も立っていた、同じ場所に三年以上留まらないと自分で立てた誓いをこつとも簡単に破っていた、村の在り方が心地よかつたから。

何より今では少年から青年へと姿を変えている彼の行く末が気になつていた。

成長が遅い、いや止まつてる私を村人たちは常に気にかけてくれた、この村では非常に高価である牛乳を毎日持つてきてくれた時

は流石に断った。

人間はまだ終わって無かったんだと安心した。

この事が要因になったのかもしれないし、違うかもしれない。唯一つ真実を言えるとすれば、少女はこの時過ちを犯した。

別に後悔はしていない、失敗したからこうなった、ifを考える必要は無い、今生きる事を考える。

アレから国が村人たちに何を言ったのかは知らないが、彼らの左手には十字架があり、右手には農具が有った。

私を見る目は物々しい汚物のような嫉妬と恐怖と憎悪と醜悪さが含まれていた。それで十分だった。理解した。

初め私は青年とその家族を頼るため家に向かった、村人たちを説得してれと。四年間一緒に過ごした彼らだ、血は繋がっていないが私は家族のように思っていた。

彼らもそう思ってくれていると信じ切っていた。

家に入った途端、私は水を掛けられた。それは聖水だったのか身体が酷く重くなる、聖水を私に掛けたのは四年間私が母と慕っていた女だった。

後頭部に酷い衝撃が走る、小さい私の体は為すすべもなく吹き飛んだ、倒れながらも目を横にやると立っていたのは四年間私が父と慕っていた男だった。

視線を反対側に向ける。居ない。

一人足りない、私がここに留まらせた青年が、何処に居るのだろう、彼は私の事をどう思っているのだろう、『気味が悪がれたら嫌だなあ』そう思いながらも視線は彼を求めていた。

掠れた声で青年の名を呟く。

私のその姿がそんなにも面白いのか、男がははと笑いながら何かを言った。

聞こえない。

今男はなんて言ったのだろうか。

呆然と空中を見つめている私に男は笑いながら聞こえなかったのかと問う。

私はもう一度言っしてほしいと頼んだ。

「良いさ、何度でも言ってやる。もう息子はこの世にはいない。」

瞬間、世界が制止した。

男は何を言っているのだろう。

「あのクズは吸血鬼であるお前を有ろうことか庇った、家で匿って上げようとまで言った、そんな物生かしておく価値すらない。」

気がつけば私は泣いていた。気がつけば私は叫んでいた。自分自身ですら、何故泣いているのかも判らなくなっていた。

ただ、青年が自分を嫌っていなかった、それだけが嬉しかった。

私は我武者羅に男を女の方に突き飛ばし、二階に有る自分の部屋に駆け込む。部屋には青年が心臓にナイフが刺さり倒れていた。

私は青年に一瞬目を向け、壁に立てかけていた外套を羽織り、いつ家を出て良いよう一つに纏めてた荷物を持つ。

最後に四年間過ごした部屋を見渡す、そしてもう一度青年に目を向け、窓から飛び降りた。

そこからは記憶が無い。

気が付けば魔法使い共に追われていた。

規則的だった呼吸音が乱れてくる、

大木が進路を妨害すれば、逆にそれを利用し高くに飛ぶ。草木が行く手を阻めば中に飛び込み追ってを撒く。そこに有る物全てを利用し私は走り続ける。

青年は命を賭けて私を助けようとしてくれた、諦めないでいてくれた。それなのに私が諦めてどうする。

少女として今まで無為に走って逃げていた訳では無い、長いブランクは有るが久しぶりの戦闘の空気、それが徐々に少女を冷静にさせる。静かに戦略を立て、直ぐにそれを実行に移す。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

四年ぶりの呪文詠唱、魔力が体内を巡るその感覚に興奮する。
狙うは周囲の木々。

「来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。」「闇の吹雪」
「！！」

正義の魔法使い共は私が魔法を使える事が知らなかったのか、詠唱はすんなりで行えた。
現在の私が使える最高位の魔法、体内の魔力が形を為し放出されていくのを感じる。

「なっ、各自正面魔法障壁全力展開展開！！」

闇の吹雪は奴らの隠れる木々に着弾し、盛大に爆発し、視界は零になる。

それは奴らも同じ。

「おい聞いてないぞ！」

「何故吸血鬼が魔法を使える！」

「賃金に変わりは有るのか？」

魔法使いの狼狽した声が聞こえる。

どうやら私の詳細は本国まで伝わっていないようだ。吸血鬼のなり立てとも思っていたのだろう。

だが舐めるな。

「私は真祖の吸血鬼 ハイ・デイトウオーカー Evange
line A・K・McDowellだ！！」

視界が開ける前、瞬動を使い魔法使いの後ろへと回りこむ。

四年間暇があれば練習していた瞬動術。

それは既に初めの入りと抜きの気配が完全に無くなるまでに昇華していた。

故に彼らは気が付かない、死神が後ろに迫っている事を。

視界が晴れる。

「ええい、何処に行つた吸血鬼!!」

「ここだ」

「っ!？」

一斉に魔法使いが振り返る。

戦闘に立つ小隊長と思われる男が無詠唱で魔法の矢を放つ。ここまでは想定通り。

相手の魔法をはね返す盾を前方に作り出し相手の初手を防ぐ。

「氷楯 レフレクシオー!!」

「何だと!？」

そしてもう一度瞬動を使い、後ろに回り込む。

小隊長以外の魔法使いは詠唱に気を取られていて、後ろに回り込まれた事に気が付いていない。

そして、今奴らは正面に魔法障壁を集中している為私の魔法を防ぐことはできない。

無詠唱での武装解除で終わらせる。

「氷結・武装解除　フリーゲランス・エクサルマティオー　！！」

呪文の影響により生じた煙に紛れ身を隠す。

視界が完全にはれ、立っていたのは小隊長ただ一人。彼は腕を組み、静かに下を向いている。

彼の部下達は完全に気が動転しており、裸で座り込んでしまっている。

今まで黙っていた小隊長が、ゆっくりと上を向き、誰かに話しかける。

「吸血鬼、いやエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルよ。まずは、私と部下の命を救ってくれた事を感謝する。」

驚いた、まさか私に話しかけて来るとは。

しかし返事はしない、気配は完全に消しているが万が一隠れている場所を特定されてはマズイ。

「隊長！吸血鬼が我らの命を救ったとは一体！？」

「理解ができません！説明をお願いします！」

それは私も思った事だ。

今回の結果は私が起こせた最善の結果だ、少しでも失敗すれば結果は変わっていただろう。

「初め、闇の吹雪を放ち姿を消した時、彼女は既に我らの後ろに回り込んでいた、見た通り瞬動だろう。」

「っは、それは判っております。しかし……」

部下は納得できていない様子だ。

それは当然でもある、何故後ろに回り込まれただけで命を救われた事になるのか。

「思い出せ、あの時我らは正面に魔法障壁を展開し後ろにはしていなかった。結果それが理由となり貴様らは武装解除されているだろう。我らは最初の瞬動に気が付けなかった、その時点で敗北は決まっていた。しかし彼女はそこで我らを殺さず武装解除を選んだ。」

「……………」

部下は話を理解し沈黙する。

私は、無意識の内に人殺しを避けていた——？あんなに恨んでいた人間を殺すことを躊躇った？

過去十年を回想する、確かに私は……。

なんて男だ、立った一度の戦闘で私の心情を読み取ったのか。

「エヴァンジェリン、その考え方は甘い。だが、…今回は見逃そう。しかし我らは——」

私は小隊長の話を最後まで聞かずにそこを後にする。

判らない判らない判らない

私は何を考えてるのか。

人間が何を考えているのか。

何で命を狙うの？生きていてはいけないの？
誰か、助けて。

「誰か、私を助けてよぉ……」

不気味な静けさが広がる森で、その日少女の泣き声が聞こえたという。

エヴァま 第一話（後書き）

最初にここまで読んでいただいております。ありがとうございます。

この物語は連載となっておりますが、需要が無かったり面白く無かったりした場合、短編として一話で完結させる予定でいます。

参考にしたので、皆さんの感想と意見をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0760z/>

エヴァマ

2011年12月2日23時01分発行